

送る言葉 “岩村 秀先生に魅せられて”

古賀 登 (化学専攻)

岩村先生を送る言葉の執筆依頼を受け、さて書き始めようとしてハタと困惑してしまいました。私自身、先生の元で12年間研究を行っていたにも関わらず、先生がどこで、何をされていたのか全く知らないのです。よく学会で会う人々に、忙しくて大変でしょうと声をかけられ、何のことが分からずに困ったものです。後になって、ほかの人に聞きに行き教えてもらう有り様でした。色々ご多忙を極めておられました。先生ご自身で総ての仕事を処理され、我々に一切仕事（我々にとっては雑用）を頼むようなことはなさいませんでした。このように先生は、研究できる最高の環境を作ることに気を使われていたように思えます。お陰で我々は、研究以外のことに煩わされることなく、研究のみに専念することができ感謝しております。もっとも研究以外のトレーニングがなされていないため、私自身は今苦勞しておりますが……。このような有り様です。ので急きょ調べあげた先生のご経歴はつぎのとおりです。

先生は、昭和32年3月東京大学理学部化学科を卒業された後、同大学院化学系研究科に進学され、修士課程を経て昭和37年3月博士課程を修了され、同時に理学博士の学位を東京大学より授与されました。同年4月には東京大学助手（理学部）に採用され、昭和41年7月東京大学講師を経て、昭和45年1月東京大学助教授に任ぜられました。この間昭和42年秋から2年間アメリカ合衆国ウィスコンシン大学に海外出張、光化学の研究に従事されました。昭和52年12月に分子科学研究所教授に昇任され、9年半後の昭和62年6月に東京大学理学部教授に帰任され、学生の教育、研究者の育成に尽力してこられました。

この間、学内にあっては昭和51年4月から1年

間東京大学総長補佐を、平成3年4月から2期図書行政商議委員会を、また平成3年4月から2年間大学院理学系研究科化学専攻主任と理学系研究科委員会委員を務められて、大学の運営に参画され、本学における教育、研究、行政に多大の貢献をされました。学会では、昭和56年5月より昭和62年5月まで分子科学研究所運用協議員に、平成5年6月からは分子科学研究所評議員に任命され、同研究所の研究運営に尽力されました。このほか、現在日本学術会議化学研究連絡委員会などの委員を務めておられます。

国際的にも、物理有機化学の分野の各種国際委員会の委員を務められ、ことに昭和58年から平成元年まで「国際純正および応用化学連合 (IUPAC)」有機化学部会光化学委員会委員として、国際的学術用語、単位、基準の制定に努力されました。平成元年8月大阪で開催された第6回IUPAC新規芳香族化学国際会議では組織委員会副委員長を、平成4年10月東京で開催された第3回分子磁性体に関する国際会議では組織委員会委員長を務められました。平成7年12月ホノルルで開催される環太平洋化学国際会議'95では、日本化学会を代表する組織委員および国内委員長を務められております。また、アメリカ化学会 Chemical Reviews 誌の編集顧問をはじめ、国際論文誌の編集者として、学術の国際交流にも尽くされております。

先生は、研究者としては、構造有機化学、物性有機化学の分野で多くの業績をあげられました。中でも、超高スピン有機分子、相関分子内部回転、 π 水素結合など、新しい π 電子系の分子設計と構築の研究は、約350篇の論文として公表されており、世界的にも高く評価されております。平

成3～5年度には、文部省科学研究費補助金特別推進研究「有機強磁性体の精密分子設計と構築の研究」を遂行され、ひとつのピークを築かれました。これら有機化学の分野での顕著な業績により、昭和38年には日本化学会進歩賞を、平成4年には、日本化学会学会賞を受賞されました。国内の学会活動でも指導性を発揮しておられ、日本化学会副会長、関東支部長を務められました。

岩村先生は、“まだやり残したやりたいことがある”という言葉を残して九州へ移られ、今後は引き続き、九州大学有機化学基礎研究センターのセンター長、教授として研究、教育、行政に従事されることになっております。これからも、くれぐれもお体に気を付けて、私の“ターミネーター古賀”という悪いニックネームを吹き飛ばしてください。お願いします。

バイオメカニクスのこと

遠藤 万里 (人類学専攻)



ここではバイオメカニクス (生体力学) 全体の話をするつもりはない。ただ私の関わったことを述べる。

日本においては、現在のところバイオメカニクスというと工学と医学が連携して行なっている応用科学として理解されているようである。しかし、20世紀初頭にバイオメカニクスという学問領域ができたのは、有名な発明学者ヴィルヘルム・ルーを中心とする基礎医学者や動物学者であった。当時は生物体の巨視構造・仕組みにはいかにも当時のニュートン力学で鮮やかに説明し得るよ

うに思われていた。そして、それらの分析がはじめられた。

しかし、生物のように複雑な物体のもつ力学的特性は20世紀初頭の機械力学や材料力学で解くことは不可能に近かった。ようやく、1940年代から材料力学における実験応力解析や、動力学において運動の位置、加速度のセンサーなどが開発され、それが生物体にも適用できると考えられ始めた。こうした研究者も解剖学者や動物学者であった。

私はこのような背景のもとに1953年から骨格構造の実験応力解析や歩行運動の動力的解析を始めたのだった。その当時日本ではまだバイオメカニクスという言葉さえ知られていなかった。

しかし、私が停年となる今日ではかなり様変わりしていて、多くの工学者と医学者がバイオメカニクスを専門とし、専門の機器も開発され、応用領域のみならず基礎領域でも盛んに研究を進めている。当然のことであるが、学問の進歩や様変わりは著しいといえる。